5. ^{99m}Tc-ECD の使用経験

星　宏治　加藤　和夫　鈴木　晃
佐藤　勝美　関場　盛也　（福島医大・核）
政井　章　木村　和衛　（同・放）

新しい脳血流シンチ用製剤である ^{99m}Tc-ECD を16例の脳疾患患者に1.11 GBq投与し，臨床的有用性等について検討を行った．安全性に関しては，全例ともに副作用はみられず，同時に実施した臨床検査成績でも特に異常変動はみられなかった．脳への集積は投与後3分程度でpeakに達し，以後ほぼ一定であった．早期画像では外頸動脈成分が描画されるので，至適撮像時間は投与1時間前後と考えられた．^{99m}Tc-HMPAO との比較を，灰白質／白質比および正常部／異常部比が測定可能であった6例にて検討したが，^{99m}Tc-ECD の方が両者ともに有意に高かった．

以上のように，同薬剤は脳血流分布を評価するに際して臨床上有用であると考えられた．

6. 食道癌骨転移のシンチグラム所見

山崎　哲郎　丸岡　伸　高瀬　圭
古田　進　坂本　澄彦　（東北大・放）
中村　護　（国立仙台病院・二放）

食道癌の骨転移19例39部位の所見を検討した．転移は多発性のものが多かったが，単発性のものも5例見られた．直接浸潤が1例に見られた．転移部位は主に軀幹部に多かったが，1/3は四肢骨への転移であった．骨シンチグラム上，2例でcold lesionとして認められ，注意を要した．他の画像との対比が可能であったもののなかでは，単純X線像は溶骨性の骨破壊像を示すものが多く，造骨性変化を示したものはなかった．Gaシンチグラムでの陽性率は比較的高く，骨シンチグラムで異常を示し，X線上異常が明らかでない場合，Gaシンチグラムが有用な場合があった．

7. 骨シンチグラフィ時における腎陽性集積像の臨床的考察

佐藤多智雄　吉岡　清郎　山田　健嗣
阿部　由直　高橋寿太郎　小野　修一
福田　寛　（東北大・抗研・放）
尾形　優子　山田　文夫（仙台厚生病院・放）

骨シンチグラム上，^{99m}Tc-リン酸化合物が両側腎実質に集積して，骨よりも強い陽性像を示すことがある．従来，この判定は主観的評価法であった．今回は ^{99m}Tc-MDP を用いた骨シンチグラムの後面像で腎と骨の集積濃度を濃度計により測定して比を求め，半定量的に評価した．対象は化学療法剤シスプラチン投与後30日以内に骨シンチグラフィが施行された症例21例と対照群40例である．対照群およびシスプラチン投与者の腎集積指数はそれぞれ 0.61 ± 0.09 および 0.96 ± 0.44 であった．また，シスプラチン投与後早期に腎陽性集積率が高く，さらにBUNが高いほど，腎集積指数が高い傾向が認められた．

8. 骨軟部組織病変の ^{201}TlCl シンチグラフィの検討

安久津　徹　駒谷　昭夫　熊谷　秀也
吉田　道彦　本間　次男　山口　昂一
（山形大・放）

骨軟部組織病変の診断における ^{201}TlCl シンチグラフィの有用性を論ずるために，病変部位への ^{201}TlCl の集積の程度と，良性悪性との関係，さらには個々の組織診断との関係を検討した．その結果，悪性病変では ^{201}TlCl の有意な集積を呈する傾向があったが，有意な集積の有無によって病変の良性悪性を診断することは困難であった．例えばliposarcomaでは有意集積を示さないことが多く，giant cell tumorやaneurysmal bone cystなどの良性病変でも有意集積が見られた．また，lipoma, hemangioma, fibrous dysplasia, osteomyelitisなどでは，有意の集積はみられなかった．これらの疾患では，^{201}TlCl シンチグラフィは，ほかの検査所見と対比検討することにより，それらの鑑別，除外診断に有用であると考えられる．

Presented by Medical*Online